（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（人間・環境学　）	氏名	薦田 奈美
論文題目	意味変化現象の解明―認知言語学的観点から見た意味変化―		

（論文内容の要旨）

本論文は、意味変化の過程に注目し、従来の記述において見過ごされてきた、意味変化の新たな一面に光を当てることで、これまでとは異なった観点から意味変化の現象を記述することを目的としている。語の意味は個々の話し手と聞き手が言語を使用する場面において理解されるものであるから、通言語的現象としての意味変化を捉えるべく、本稿は、人間の根本的な認知活動に支えられた意味の発生の基本モデルを構築する。意味の発生に際しては、概念領域や焦点の働きなど、人間の根本的な認知活動が働くことによって、語に新たな意味が発生するのであり、意味変化現象の根底に、いわば通言語的メカニズムが働いているという考えに基づいている。本論文で提唱されている基本モデル（本論33-34頁）とは、ある概念領域に置かれた語が別の概念領域で捉えられたり上位概念へ転移したりすればメタファー化と見、同じ概念領域内での転移であったり下位概念への転移であったりすればメトニミー化とみなすというものである。

本論の第１章では、主に先行研究の理論から、従来の研究における問題と、本論の基本的立場について述べている。続く第２章では、意味の発生の画一的なプロセスのモデルを提示した上で、それを使用して、辞書記述に見られる個々の意味変化現象を分析する試みが行われる。これに続き、第３章では、このモデルを使用する記述の実践例として、移動様態動詞の変化について扱う。このモデルを利用することで、移動様態動詞の変化を従来とは異なった方法でいかに記述できるかを示す。そして、第４章では、第２章・第３章で扱った意味の発生段階の後に、個人レベルで新たに発生したものの、一般に使用されるまでには至らない段階の意味が、どのように定着していくかという意味の定着段階について触れている。個人レベルで発生した意味の変種が、語の意味として認識される段階について、それが一般に浸透し、定着するか、あるいは通時的な流れの中での一瞬の共時的逸脱として淘汰され、消滅するか、どちらの経緯をたどるかを決定づける要因がどのようなものであるのかが考察されている。

主として個人レベルにおける意味の発生が意味変化とどのように関わるかという観点から説明を行うことが本論の主旨である。意味変化現象を段階的に区別できる現象として定義し、各段階の説明について綿密に考察を行っている。意味の定着について意味の発生段階における考察を踏まえて自らの見解が述べられており、総じて、認知メカニズムを基盤とする基本モデルの適用を、意味変化の記述方法の指針として示し、基本モデルを通した考察を行うことによって、従来の意味変化の研究によっては明らかにし得なかった部分も含め、意味変化現象についての明確な記述を行うことが主眼とされている。認知言語学の知見を活用し、従来、音・形態など他の諸領域と違い、研究への取り組みの進展が遅れていた意味変化現象を体系的・統一的に説明しようとした野心的な論文である。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

話し手と聞き手が実際に言語を使用する場における根本的な認知活動を基盤として、新しい意味の発生が絶えず起こり、その発生のプロセスをモデル化して、そこから体系的に意味変化を記述・説明しようとする本論の試みは、意味変化を一貫した立場から記述しようとする手がかりとなる共通モデルを構築し得たことにより、一定の成果をあげていると言えよう。意味の発生の基本モデルの構築は、意味変化の全体像を記述する上で、従来の研究では説明しきれなかった部分を明らかにし、その記述方法を統一し明確な記述を行う点で十分にその役割を果たすものであると言える。

語の意味の変化の法則性を発見する試みは19世紀後半から20世紀初頭に始まり、その後、社会言語学や心理言語学などの観点を取り入れて本格化に行われるようになったが、ただ、こうした従来の研究には、意味変化に関わると考えられるメタファー・メトニミーをはじめとした認知的な言語現象を捉える視点に統一性がなく、意味変化の原因・メカニズム・背景など意味変化現象全体を新たに体系的に捉え直す必要があった。本論は、意味変化現象を、実際に個人レベルで言語が使用される場において意味が発生し、そこで新しく発生した意味が慣習化して定着するという段階的なプロセスを持つ現象として捉え、さらに、個人の言語使用の場に働いている人間の意識いわゆる語用論のレベルの問題を考慮に加えた。

確かに本論の中には、メトニミー化など、後続する議論の起点となっているにも拘わらず、定義のやや不明瞭な術語が見受けられたり、用例収集が基本的に辞書に依っていたり、論証の進め方として少し荒削りな部分がなくはない。しかしながら、意味の発生に際して、概念領域や焦点の働きなど人間の根本的な認知活動を軸に据え、意味変化現象の根底に働く通言語的メカニズムを解明しようとする一貫した強い姿勢は説得力が感じられる。認知メカニズムを基盤とする基本モデルの適用を、意味変化の記述方法の指針として示し、基本モデルを通した考察を行うことによって、従来の意味変化の研究によっては明らかにし得なかった部分も含め、意味変化現象についての明確な記述を行っている点は大いに評価できる。

このように本学位申請論文は、共生人間学専攻言語科学講座の理念に叶ったものであり、また当該領域における研究現状の把握・方法論の確立等、説得力のある記述がなされており、博士論文の水準に十分達していると言える。平成22年１月12日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降